

Bit Actor

演目：聖夜の届け物

水島 一輝

演目：聖夜の届け物

ピロロロロ……。

ピロロロロ……。

電話の着信音が繰り返される。

引越しを終えたばかりの事務所の電話が鳴っている。壁や窓、そして空気は新品で新鮮そのものだ。電話の鳴る一つ向こうの扉の先からスーツを着た男が、まるでダンボールが足にはまったかのごとく見苦しい動きでやって来た。

「どこから私目を呼んでいるのかな？」

あちこちに散乱している荷物を崩しながら、音の方へと近づいていく。広い机の上の書類やファイルなどを押しのけて、ようやく電話の受話器を上げた。

「お待たせしちゃいました。引越しを終えたばかりのオフィス・エトプリでございます！」

まったく悪びれた言葉は一言もなく、むしろあっけらかんと明るい調子の声だ。付け加えて、息切れも甚だしい。三十過ぎの男が電話を受けるには幼稚過ぎる。

〈お昼時に申し訳ございません。先日、お願いを致しました横山です〉

受話器を持って息の上がっている男は、一瞬間が空いた。

「ああ、横山さんね。どうかしましたか？」

男はそう答えつつも、内心思った。

横山？ 誰だっけ——？ あ、もう昼？ あと十五分で一時か……。

壁に掛けて少し、曲がっている時計を見た。

〈今日が本番なので……。そちらに指輪、届いてますよね？ 昨日連絡がなかったので、少し心配で……〉

——指輪。

——今日が本番？

——。

——今日って、いつだ？

男は、ズボンのポケットから携帯電話出して、日付を確認した。

——あ、忘れてた。

世間はクリスマスというイベント一色の日、すでにお昼を過ぎたというのに私は寝ていた。男と聖なるイブの夜を過ごしていたからということではない。そこは強く言うておきたい。むしろ、そんな風に過ごしたいと願いたいところだ。

寝たのが朝方だったからいいよね、という言い訳を何度か目を覚ますたびに自分に言い聞かせ、何度も寝直していたらこんな時間になってしまっていた。そろそろ起きなきゃと頭の中で反芻させてはいるけれど、体は言うことを聞いてくれない。

そこに、私の携帯電話が鳴った。体がビクっとした。音量を大きく設定してあるので、ビックリすることがよくある。でも、この曲を聞くと元気になるから好きだ。今や日本で知らない人はいないくらいの人気アニメの最初のオープニングテーマである。とある実を食べると特殊な能力を授かる代わりに、海では泳げない体になってしまい、それでも海のどこかにある大秘宝を探すという人々のお話だ。

この説明をしていたら、サビがちょうどおわるころだった。枕元にあったギャンギャン鳴る携帯電話の液晶を見ると、十一桁の数字と「エトプリ・檜原」という字が表示されていた。

受話ボタンを押すと、テンポのいい音楽が止まった。と、同時に威勢のよい明るい声が聞こえてきた。こちらも着信音に負けていない。

〈さくら、仕事だ。今から、事務所に来い。本番は今日の夜七時から〉

「……無茶言わないでください。私だって、朝方まで本番だったんですよ」

私の声は、風邪を引いている訳でもなくガラガラ声だった。酒やけというものか。そんなに飲んだ記憶はないが、なんだかんだでよく話をしてきた。

〈あれ、もしかしてもしかすると寝てた？〉

「もしかしなくても、まだ布団の中です」

〈なんだなんだ、その声は。あ、そうか。クラブイベントの本番だったなあ、そういえば！ 飲まされたのか？〉

そう言って、受話口の向こうの姿が目を確認できるくらいの笑い声がしてきた。朝方まで本番や寝てたとか布団の中だのクラブイベントだの、一つ会話路線を間違えるといかかわしい会に参加していたと思われそうだが、断じてそうではない。寝起きからそんな話をされても困る。けれど、もう少し体に自身があればと思いたいところだが、読者の想像を膨らませられるほどの魅力は私にはない。

〈それで、ちゃんと演じられたのかよ？〉

「……。もちろん、バレることなく幕は降りました。監督も大喜びでした。ああ、また連絡するって言ってましたよ」

〈おお、そうかそうか。それはなにより。ともかく、今日、さくらは予定ないんだろ。四時までには事務所に来てくれ〉

二十歳ちょっと過ぎの乙女に向かって、そういうことを良く言えたものだ。全くこの人は……。と、さくらは文句を言い返そうとしたがいつものことだと思いやめた。

「わかりました。で、個人的に用意するものはありますか？」

〈んー、衣装はこっちにあるやつを使えばいいから、バスタオルと普通のタオルを多めに持ってきてくれればいいや。あとメイク道具忘れんな。それと面倒くさいからってな、事務所に来るときも軽くメイクぐらいして来いよ。新事務所だぞ、間違えるなよ。向こうに行っても俺はいないからな〉

檜原は、さくらに言いたいことを好きなだけ言って電話を切った。

「寝起きの女性に、普通そういうこと言うかしら……。本当にデリカシーのない人……」

いつもの待ち受け画面を見つめながらぼそっと言った。

それにしても、バスタオルと普通のタオルを多めに持って来いって、私、そんなに濡れちゃうの。

私、浅川さくらは、遅めのお昼を食べて、もろもろ準備をして、もちろん軽くお化粧品をして家を出た。事務所に行くには二通りある。バスで一本かバスと電車を併用して行くか。バスで一本の方が楽ではあるが、わずかに交通費が高い。ずっとバスに乗っているよりは、最寄り駅までバスで出て、電車に乗って行く方が気持ちも弾む。移動しているって感じがする。

バス停は家の近くにあり、三分前に家を出ればさほど待たずにバスに乗れる。特にこの季節は、待ち時間ほど寒さを感じることはない。私の髪型がショートだということもある。でもモコモコした帽子をかぶって、マフラーをすればどうってことはない。どうも長い髪が扱いづらい。性格ゆえか。仕事上、女性の魅力を少なからず半減させていることこのうえない。あえて、プライベートではと言わない。

すぐにバスは来た。

三時前という時間帯、ほとんど人は乗っていなかった。貸切感を味わえる。だが、心細いことも内心秘めている。次の停留所で小豆色の毛糸帽子をかぶったおばあさんが乗ってきた。少し腰が曲がってはいるが足取りはしっかりしている。目の前にスーパーがあり、夕飯と明日の買い物をしてきたのだろうか。買い物袋が二つしっかり握られていた。

——私はすぐに人を見入るくせがある。

バスに乗って椅子に座ると少し不安になる。そう。ちゃんと戸締りをしたか。家に誰かいれば別だけど。あと忘れ物を実はしているのではないか。それで、カバンの中をガサコソと確認する。私は仕事で使わないものであろうとカバンの中に入れておかないと不安になったりするものもある。気づいたところで、私はバスを降りて家に戻ったりはしないのだけれど。そういう時は諦めるのだ。受験生の受験票なみに重要でない限り。その方が色々楽になる。特に心がね。

バスは電車で移動するほど距離はないが、景色が移り変わってゆく。近くのものを目で追っていけるから好きだ。

そうこうしているうちに、バスの終着点にたどり着いた。三時を少々過ぎたところ、太陽はまだ空にあるが既に夕方の雰囲気を作り出しているなど私は感じた。改札をくぐったら、目的地とは反対方向の電車に乗って、気ままにどこかへ行ってしまいたい。そんな風に思わせる罪なオレンジ色の光。罪ゆえに一時間もすれば闇へと変えさせられてしまう。

改札横には、小さなパン屋さん兼カフェがある。今年できたばかりで、改札の中からも買い物ができる。小さいながらもお茶を楽しんでいる人達がいる。電車待ちをしているのだろうか。

改札をくぐると目的地の方面の電車がすでに扉を開け待機していた。隣の番線には、目的地とは反対へ向かう電車もあった。この駅は、T線の始発駅。端っこに当たる。また乗り継ぎ駅でもあり、別の線が二つ乗り入れていて普通の駅よりはホームの数も多い。

私は、素直に電車に乗った。車内は思ったより乗客が多かった。座席はほぼ埋まっている。向かいにある電車から乗り継いだ人たちだろう。仕事帰りのサラリーマンやこれからどこかに遊びに行くだろうカップルや大人たち。下校する女子高生ら。

よくよく考えてみると今日は休日だ。それにクリスマス……。働いている人、ご苦労様です。私もこれから一仕事なのです。

さくらは、空いているドア付近に立った。はぁーとため息をする。自分の荷物が目に入った。少し大きめのエコバック風の袋がまん丸に膨らんでいる。さくらはそれを抱え込み、押しつぶしてみた。

一体、何に使うのかしら。

車内にアナウンスが入り、ホームでは明るい発車音楽が鳴った。まもなくして扉が閉まり、電車は発車した。電車でも景色を眺めることが好きだ。ただ、近場の景色はバスより早く移動して見えるので遠くの景色を見る他ない。こうやって立っている時しか見る余裕はない。座っていると、向かいの座席に誰かしら座っていたら見られない。子供のように後ろを向いて外を眺められれば別だ。

事務所のある駅はここから二駅なので、バスに揺られている時間より短い時間で到着だ。十分、景色を堪能出来るほどの時間ではない。

流れ行く景色は、ほとんど住宅だ。時折、踏切を通り過ぎる。自転車の後ろに乗った子どもが手を振っていたり、待つことにいらいらしているお兄さんを一瞬見たりする。私の降りるH駅に近づくと大通りをいくつかまたぐ。車が列をなして電車が通り過ぎるのをちゃんと待っている。街中っぽくなっていく。

何事も準備が八割だという言葉がある。言うまでもないが、私の言葉ではない。そう言っているのは、檜原さんだ。物事を遂行させるためには準備が八割を占めるのだそうだ。とある世界には、『そなえよ、常に』という言葉も存在すると聞いたことがある。

檜原さんが必要だと言っているのだから、必要なのだろう。どう使うのだろうか、このタオルたち。気になる。今日の仕事は一体……。

私の仕事。

本番・演じる・幕が降りる・監督という単語から察するに役者か何かだろうと類推してもらえたいと思う。大きなスクリーンに映しだされる映画俳優か。華々しいデビューとともに出演依頼が来たテレビドラマか。それも違う。ここまで来るのに誰かに声をかけられたらだろうか。否。東京公演を皮切りに日本各地を回る舞台役者か。それでもないし、小劇団の小劇場の売れない女役者でもない。私はプライベートアクター。私立役者。一般の人から依頼を受けて、誰かになりきり、世間という舞台上で役を演じるのである。声を大にして言うほどの者でもない。変に目立っては駄目なのだ。

この仕事を初めてから自分の名前が好きではなくなった。そこまで嫌いなわけではないけど。きれいな名前だと思っているし、ひらがなは日本だけで使われている字だろうし誇れる。でも、せめて漢字を当てていてくれたらと思うことがある。

私立役者。いわば、サクラみたいなもの。主人公が立つ舞台を客席側から盛り上げるような役だろう。まさか自分がそれをするとは思ってもいなかった。

私だって、華々しい女優生活を夢見ていた。テレビドラマや映画に引っ張りだこ。高校時代は演劇部だったし、当時は頑張ればなれるかもなんて思ってすらいた。演劇センスだって誰よりもあったと自負していたが……。

高校を卒業して、アメリカに留学した。私なりに思い切ったことをするなと思っていた。その

くらいした方が良く示しになると思った。周囲にも何よりも自分に。強い意志がそうさせたのだ。

しかし、何度も壁にぶつかり、何度も壁を見あげて、それを乗り越えることもできず帰国する結果になる。言葉の壁だったり、演技もそうだ。そして、個性……。何も私は見出すことができず、一年して帰ってきた。もしあの時、壁を見上げず、土を掘り進んでいたら抜け穴くらい出来たかもしれない。あわよくば、壁が勝手に崩れてくれたんじゃないかと思う。今になってそんな空想を抱けるようになった。

電車はH駅に到着し、私は改札へ向かう。

H駅はそこそこ大きい街の中心駅である。駅周辺にはデパートなどもあり、賑わっている。それに大学の多い街でもあり学生で溢れていたりもする。

ちょうどこんな感じだった。今見えている改札のあたり一面、雰囲気、天井の高さや絶対的な面積が違えど、私が帰国した時の空港のロビーのような賑わいだ。私以外、一人一人スポットライトを浴びているように思えた。

この駅は今まで北口側が賑わっていたのだが、ようやく役所が重い腰をあげて南口の再開発に着手した。そして、先月、その再開発が終わった。大きなカメラの名前がついた家電量販店が南口出たすぐのところにできた。北口には昔からとある橋のカメラなる名前のついた同規模の家電量販店があるが、こうなってはいろいろと必死だろう。またイベントホールや山脈のような名前のついたスーパーマーケット、どこからか移動してきた病院や歯医者、ファミレス、カフェ、本屋、マンションとしての住居フロア、事務所フロアなどが入った複合型のタワービルがコンコースでそのまま繋がっている。噂によると最上階の部屋は大物演歌歌手が部屋を買ったとか。夜の眺めは良さそうだ。

コンコース、いやペデストリアンデッキと呼ぶほうが正しいのか。そのペデストリアンデッキ・高架歩行者回廊はビルの二階部分で、地上は広場とバスロータリーになっている。コンコースから階段、エスカレーター、そしてエレベーターもあり上と下を自由に行き来できる。広場にはベンチも置いてあり、待ち合わせには良さそうだ。

事務所は、目の前にそびえ立つタワービルの中にある。先日、引っ越したばかりだ。屋根も付いているので、雨が降っていても傘を広げる必要もなくなった。これで事務所に行きやすくなった。ビルへ向かうコンコースを歩いて行くと、スーパーの入口が見えてくる。そこで、夜のクリスマスに向けてなのか、外でケーキを売るための仮設販売所を作っている。サンタの格好をさせられた髪の長い女性店員もいる。寒いのに大変だと人事のように思ってしまった。

私はそれを遠目に見て、ビルの脇にある入り口へ向かった。

さくらが事務所入り口のドアを開けると半分までしか開かなかった。積み重なったダンボールにぶつかってしまったようだ。

「なんでこんなところに……って！」

きたねえー。

私は、声に出さなかった。部屋の中はパーティションなどもなく、全体が見渡せた。新しい事務所だから少し気持ちも弾んでいたのに。ところ狭しと荷物が折り重なっていた。ほとんどがダンボールなのだが。ところどころひっくり返したのか、倒れたのか衣装や書類のたぐいが飛び出ているものもある。

以前使っていた棚や机、ソファなども、配置を想定して置いてあるようだが、荷物にうもれていた。

来て早々、これはテンションガタ落ちだわ。

「お、来たか」

檜原が奥の部屋から出てきた。

「全然、片付いてないじゃないですか」

ダンボールで作られた道を檜原が通って近づいて来た。一つあくびをして。

「ああ、まったく手を付けていないからな。ほら。これが今日のシナリオだ」

檜原はくしゃくしゃになった一枚の紙を私に渡してきた。きっと荷物の中からやっとのことで見つけたのだろうか。見てみると、十行程度の文章が書かれている。

「短すぎませんか？ 内容も薄い感じ……」

私はそれを読んで思ったことを言った。いつもだったら、もっとしっかりト書きにまで指示など書いてあるはずなのに。檜原さんが手抜き？

「それはそうだと。監督の書いたやつだからな」

「檜原さんの書いた演出込みのシナリオを下さい」

「それはできない。なぜならば、作っていないからだ！ ダハハハハ……」

檜原は威勢よく笑った。そして、自分の椅子に座った。自分の周囲だけは片付けた様子で、すっきり整頓されていた。

「笑い事じゃないですよ。笑ってる暇があったら作ってくださいよ。十九時からなんですよ。あと三時間で本番ですよ」

「そんなに心配するなって。少くくくらいアドリブも必要なときもあるじゃんか。今日の演目の流れは簡単だからさ。落ちてきた指輪を拾って、主人公の元へ届ける。以上！ な、簡単に覚えられたら？ 台詞はシナリオにも書いてあるように一言だけ。指輪を手渡す時に『お届け物です』だ」

「……」

な。とか、だ。で、まとめるな。

「落ちてきた指輪ってどこから落ちるんですか？ 落とす役は誰が？」

「指輪は、このビルの屋上から落とす。落とす役は俺だ」

「こんな高いビルの上からですか？ もし風に流されて人に当たったら……」

「そうなんだよ。無理言ってくれちゃってさ。この監督。でもシナリオに書いてある以上、その演出は変えられない。主人公ともう一人がそれを見ているからな。落下シーンは次に続く大事な大事な要素でな。それにな、さくら」

檜原はそう言って、一度間を空けた。そして、いっさい微笑のない顔になって、
「必ずお前が、キャッチしろよ。その指輪、婚約指輪だからよ」

——馬鹿だよ、この監督。

「何を考えているんですか、この人！ 舞台装置とかあれば別だと思いますけど、この短時間でそんなモノ用意できるわけありませんよ」

私は勢い良く檜原に近づいて行って叫んだ。檜原は、近づいてくる私を、私の頭を手で押さえた。

「落ち着けて。焦るなっの。悪い癖だぞ。ちょっと状況が厳しくなったり、変化しても少し落ち着け。だから、アメリカに行ってっガバザ」

その続きを私は言わせないように、檜原の口を、いや顔を、タオルでいっぱいの袋で押さえつけた。

「それ以上は、禁句です」

私がそういうと、檜原は両手でオーケーサインをしてみせた。自分でも分かってはいるけど、実際耳で聞くと本当に気落ちする。私は袋を離れた。そして、ため息もした。

「ということで、さくら。コーヒーでも入れてくれよ。さくらの入れたコーヒーが飲みたいな」と、檜原は猫のような甘えた声を出した。

何が、「ということで」、なのだろうか。どうしてコーヒーの下りになるのかも分からない。本当にこの人の考えていることや監督の考えも分からない。やっぱりこう言うことを察することができないと役者には向いていないのかな……。やっぱり、求められていることが理解できていないのかな。

「……はい」

私は小さな給湯室へと向かった。入居が決まったとき一度ここへ来たことがあったので知っている。とは言っても、パーティションがないから、ぐるりと見渡せばどこにあるかぐらい分かる。給湯室というよりも給湯コーナーだ。

ちゃっかりコーヒーメーカーや湯のみ、お茶の一式が並べられている。冷蔵庫や最近、取り入れたウォーターサーバーも置かれていた。とりあえずここだけは檜原さんがやったようだ。私が来るのを見越して。コーヒーくらい自分で淹れればいいのに。私はドリップコーヒーの口を開け、檜原さんと私のコーヒーカップにセッティングした。あとは、ウォーターサーバーのお湯を注ぐだけだ。

あまたの茶色の生命の泉から落とされる味と香り。一分もすれば、最高の生命体のできあがり。

私は、出来上がったカップを両手に持った。すると檜原が、姫こちらにお座りくださいといったような動作をしてきた。今までダンボールで埋まっていた向き合いのソファが現れていた。

私は向き合ったソファの間にあるガラステーブルにカップを置いた。

「どうぞ……」

とりあえず笑顔で言って見た。そして、ソファに座った。檜原も私が座るのを見て向かいに座った。すぐにカップに口をつけた。

「んー、いいねえ。こういうストレートな感じ。入れた人物を写し出しているな、これ」

「えっと……、ドリップですけど」

「ふーん。ほんとにストレートだね、さくらは。出会ったときに比べたら明るく色々と話をする女性になったよ」

そう檜原に言われて、私は自分でもそれは分かる。むしろ自分がそれを一番自覚していると思う。

「なんとかって兄弟会社が共倒れしたとかで、不況と言われた社会が立ち上がれないくらい底が沈んだ……らしい」

らしいって知って話していなかったのか、と思わず内心突っ込んだ私。なぜ、そんな話を？

「余裕ってやつが消えたみたいだ。いつかのさくらみたいだ」

一人で抱え込んでいた時だ。帰国した時、空港で感じたスポットライトを浴びてなかった時のよう。

「一人であれこれ抱え込まなければならなくなった。時間もなければ、人手も足りず猫の手も借りたくなるような時代になっちゃったわけだ。そう、人は役を持ち過ぎている。できないところですらそれを補っていかなければならない」

「そうですね。都会から離れているここでもなにかせわしなく人が動いているように見えます」

私はそう言って、改札を通り過ぎる人々を思った。檜原は、一口コーヒーを飲んで笑顔になった。

「まあ、こんな時代だからこそ、新たにプライベートで役者が必要になってくるんだ。友人や知人で済まないことを誰かに頼みたい。それが出来れば、楽になる。何かが飛躍する。役者の使い方は自由だ。俺のポリシーは、犯罪行為でなければ仕事を受ける。たとえ、シナリオのエンディングが、カップルの仲を裂こうともそれを監督が求めるなら我々はそれを遂行する。幸い、今のところそういった仕事はない。これからもそう願うところだ。ただ、実際のクライアントは素人だ。だから俺達がプロの演目を組むのだ。演出もこみでな」

「だからって、今回の依頼は、なんか……」

私は続きを言おうか少し迷った。あんな数行で子供だましのよう。無理な演出を言ってきて。それを私がやるのかと思って、さっき渡されたシナリオの紙を思い出した。もとあったようにしわくちゃに丸め込みたい。

「幸せのために俺達が使われているって思うか？」

檜原は、私の言いたいことを分かっていたのか質問してきたので、私はなにも言えなかった。思わずそれを隠すように、コーヒーを飲むしかなかった。

「依頼人の要求には答えねばならない。監督の考えたシナリオ通りにな。監督が求めているものを二倍いや、三倍にして再現する。それで喜ぶ人がいるんだからいいじゃないか」

「それはそうなんです……けど」

けど。喜ぶ人がいて、それ以上に何を求めている。今の自分にとってはそれで十分だって思っている。いや、そう言い聞かせているだけかもしれない。このコーヒーのようにお湯を注がれてコーヒーとして全うしている。それ以上でもそれ以下でもない。なのに私は……。

欲張りなのだ。それに見ず知らずの人に利用されていると思ってしまった。

見ず知らずの多くの人々が赤い絨毯の両脇に笑顔で手をふっている。私はその赤い絨毯の上を素敵なドレスを着て笑顔で歩いている。見ず知らずの人たちに。

さくらには、そんな光景がコーヒーの水面に映っていた。

「俺の立ち上げたオフィス・エトプリの料金はそこそこ値段が張るのはそういうことだ。さくらの給料もいいだろ！ いい仕事してるからな。一般的な役者とはわけが違う」

そういうとテレビや舞台などで活躍している人たちを悪口っているようだが、そうではない。役者と言っても立ち振る舞う場所が少し違うと一線画しておきたいという意味だ。檜原の喋り出した口は止まらない。

「当然だとも。依頼主の人生が掛かっているんだからな。映画のような作られた設定ではない。一般世間を欺かなくては意味が無い。人には、必ず自分という役が一人一人にあって当然重い。代わりの役者はいない。間違っても俺達がやっていることに再演やテイク2というものは存在しない」

いつの間にか檜原の表情は真剣そのものになっていった。

「だからこそ、私には、そのプログラムされたシナリオが必要です。でないと何も出来ないただの……人間です」

私も真剣に言った。それでも最後、私はうつむいてしまった。

「それでいい」

「えっ？」

「プログラム通りなんてのは、パソコンとかロボットかなんかだろ。そんなモノには務まらないんだよ。俺らの仕事は映像やニュースのように記録としては残らない。それを宣伝する媒体は当然ない。必要性もない。目に映る、その場でしか味わえない生の臨場感。当事者にしかわからない世界。それを創り出すのが俺たちプライベートアクターだ。シナリオの最後の『。』を演じ終えて、拍手喝采の中、幕は降りてこない。誰だってそんなのは嫌なはずだ。だが、拍手喝采がなくともそれを望んでいる人たちがいる。シナリオ通りにならない時だってある。だから、ただシナリオ通りにこなすのではなく、シナリオを柔軟にこなすアクターであってほしい。それがお前でもある」

「それって、絶対幸福論か何かですか？」

私にはいいことを並べているようにしか聞こえてこない。いや、私がそう思いたくないだけ。

「それをいうなら檜原幸福論と言ってくれ！」

檜原がそう言うと、私はため息を付く。結局、檜原さんだって自分自分じゃないですか。

「俺らは大量生産には向いてはいないから、その価値観は小さく感じるだろう。もちろん数で価値は決められない。お金の換算される時代に生きているからかもしれないがな。それでもその時、お前を意識して見ている人は数少ないかもしれない。いや、ゼロかもしれない。だけど、ピンポイントで求められているんだ。そんなに意識することはないと思うが、その人のためにやるっ

てのも悪くないぞ。女が男を愛すように」

コーヒーをグッと飲みほした檜原の表情は言い切ったぞと言わんばかり。確かにわからない訳でもない。ああ、やっぱり私って優柔不断。こんなに色々と檜原さんなりに声をかけてくれているのに。

これで檜原の話も終わりだと思い、私も冷めたコーヒーを飲みほした。

「なんで、そんなに意気込むんですか？ やっぱりライバル業社を意識しているんですか？」

舞台上で出くわしたことはないが、いや当然か。それがわかる程度の演技なら役者じゃないか……。

「当然、同業社には負けられない。スタンド・リバーやハッピーテンプルの近隣事務所にはな。同業がいるから発展するんだよ。人も同じさ。同じより違っていた方が面白い。その差はマイナスじゃないぞ、さくら！ さくらをそんなふうにしたことは一度もない。バリエーションが一つ増える。想像が膨らんで、より完璧な舞台を創ることができる。さくら、お前はお前で良い。タブーがあっても、それもさくらだ。それほど付き合いは長くないが、一緒にやってきた仲だろ。気づいているくせに、さくらも！」

さくらは、二つのコーヒーカップを洗い終え、タオルで手を拭いた。洗われたカップのようにさくらの心もすっきりしていた。まだ役者としてプライベートアクターとして曇りがない訳ではない。でも、その曇りも次第になくなっていくと自分自身でわかった。目の前にわかってくれる人がいる。私を私として見てくれている。必要としてくれている人のために演じてみよう。

さくらは、ぎゅっとタオルを握りしめた。

部屋の奥でがちゃがちゃと物音がしてさくらが振り返ると檜原が、何かをダンボールから無理矢理引っ張りだしていた。

「よっと。ほっと。さくら、そろそろスタンバイだ。衣装は隣の部屋に出しておいたから、上手く着てくれ」

「はい」

さくらは、衣装を上手く着るという意味がわからなかった。しかし、隣の部屋に行ってみると無造作にダンボールの上に置かれた赤い衣装が目に入った。すぐにはその意味はわからなかったが、檜原が電話でタオルをいっぱい持って来いと言ったのを思い出した。

「そういうことね。単に着るだけじゃダメってことか。よし！」

陽も早いうちに沈み、冷たい風が吹いている。駅から出て来る人々は亀のように首を縮込め肩をすくめ顔をマフラーの中に隠す。そして、自然と歩くスピードが速まっている。

事務所の入った複合ビルの下にあるスーパーの出入口やその前に広がる小さな広場には照明が辺りを雰囲気良く灯し、イルミネーションがチカチカと規則的に時には不規則的に聖なる夜を彩っている。

スーパーの前では、クリスマスケーキの特別販売コーナーが設けられている。髪の長い女性がサンタクロースの格好をして一人でケーキを売っている。仕事帰りの人が買って帰っている。

「ありがとうございました」

サンタの女性・柚木千華はお辞儀をした。そして顔を上げるともう一人サンタクロースが立っていた。

「やあ、しっかりやってるかい、女の子サンタちゃん」

さくらはサンタになりきって自分なりに言葉を発してみたのだ。千華は、ハッと目を見開いた。まるで彼女の中だけ時間が止まっているようだ。

どうして柚木さんは私を見てそんなに驚いているのだろうかとさくらは思った。なにかセリフが間違っていたのだろうか。柚木さんも私と同様エトプリに所属するプライベートアクターだ。彼女だって檜原さんから話を聞いているはず。サンタ姿の私がやってくることを。でなければ、ここでサンタの格好をしてケーキを売っている訳がない。シナリオを違和感なく演出するために世間と同じレベルを保つことが必要とされる。だからスーパーにケーキ販売の許可を得たと檜原さんは言っていた。店前を使わせてもらうためにスーパーのケーキを使わせてくれと言ったらとんとん拍子で話が進んだとか。別にケーキでなくてもサンタの長靴に入ったお菓子販売でもいいのだろう。

わざわざサンタを溶け込ますのにここまでやる必要もなかった気もするが……。柚木さんにとっては普通のアルバイトじゃん。

千華は、やっと現状を理解出来たみたいで、さくらに笑顔で軽く首を頷かせた。すぐに本来の仕事に戻った。

「いらっしゃいませー。クリスマスケーキはいかがですか」

歩き去る人々におっとりとした色っぽい声で呼びかける千華は、かなり大人びて見える。私より年下なのに……。やっぱり柚木さんのようにロングヘアーにした方がよく見えるのかなあと内心さくらは考えていた。

「さあ、クリスマスのケーキはいかがかなあ」

と、さくらもサンタクロースになりきって千華と一緒に販売コーナーに立つ。ちらほらとお客さんが販売コーナー前まで3バージョンしかないケーキを吟味して買って行く人もいれば、なんにも反応を示させずに去って行く人もいる。その反応は様々だ。

千華がちらっと腕時計を見てさくらを見た。さくらも自分の腕時計を衣装の袖をちらっとめくり確認した。また千華の顔を見て頷いた。メインシーンの始まりだ。

定刻。

檜原に今回の演目を依頼した男横山は、膝まであるコートを着て女性と広場の一角あるベンチに座っていた。他にも若いカップルたちが寒さを感じさせないほど仲睦まじく会話をしている。それに漏れず横山たちもそうだ。しかし、他愛もない話をしていた横山の心臓はバクバクとうなっていた。今回の演出が上手く行くのだろうかと心配していた。あの軽い喋り口調の檜原をあまり信用できていなかった。いまさら引き返す訳にもいかない。指輪を向こうに渡してしまっているのだから。

横山は時計を見ると定刻を数秒過ぎたところだった。ずっと上を見上げた。駅から岐路に着く人々がデッキを歩いている。それより上、あちらこちらに部屋を灯す明かりが外に漏れる複合型ビル。ビルの天辺と暗い空のとの境界線に目をすぼめた。

すると、キラッキラッと何か小さく光る。それを見た横山は指示した演出通りだと安心した。

「ほら、あそこ。見てご覧！」

横山は、パートナーに指を差して言うと、なにになにとでも言うかのように、指差した先を眺めた。

「なにかキラキラ光ってるの見えない？」

「どこどこ？」

例に漏れず、普通のカップルのやり取りだ。

「ビルと一番上あたりだよ」

横山も光を見失わないよう必死だった。

「一番上……」

指を差して空を見上げている二人を気にする者はいなかった。それぞれが自分たちの世界に浸っているのだ。しかし、唯一赤い人物がデッキの上から二人の視界に入らないようにこっそり見つめていた。

「あ、ほら、光が落ちて行くよ」

横山の指す腕の角度がだんだん下がって行く。パートナーも動き始めた光を捉えた。

「ほんとだ。何、ユーフォー？ それにしては小さ過ぎるか」

二人の視線は落ちて行く小さな光に合致していた。光が落ちれば落ちるほど、その光量は少なくなっていくように見える。ビル下が街灯照明やお店の看板で昼間のように明るいからだ。だんだんと光が消えていくなと思っていて、

「消えちゃった！」

光に溶け込んで消えたのではない。電気のスイッチを切ったかのようにパッと消えたのだ。横山は、動揺する。どうなって……。まさか風で流されたのか。もしそうだとしたら、指輪は落下の衝撃で傷がついてしまうかも。傷くらいならいい。ましてや、壊れてしまっていたと考えだしたらきりが無い。今すぐに立ち上がって拾いに行きたい。いや、待っているべきか？

「ねえ、どうかしたの？」

横山はパートナーに何度か声をかけられて我にかえった。

「ああ、何でも……」

ないわけない。どうすれば……。彼女がいるのに突然電話をしに行くのも気まずい。かと言って、指輪がどうなったのかも気になる。このあと届けてもらえる手はずなのに……。

「どうしたの。急に深刻な顔しちゃって」

「え、そうかなあ。ハハハ……」

どう見ても彼女には怪しまれているだろう。横山は、ここは思い切って指輪を探しに行こうかと決心してビルの方を見た。デッキから横山たちがいる広場につなぐ階段を堂々とサンタクロースが降りて来ていた。広場に降りると、その場にいる人たちの視線がサンタに向けられる。ガヤガヤと声上がるが、時期が時期だけに騒がれることはなかった。そのサンタは周囲の目を気にすることなく、広場の中央を通過して迷いなく横山たちのいるところへ向かっている。

「ねえ、サンタクロースがこっちに……」

彼女が横山に言うと、二人の前に絵本から出て来たようなサンタクロースが立ち止まった。白い口ひげをたくわえ、イメージに反しないふっくらしたお腹と体格。唯一違うといえば、トナカイとプレゼントの入った白い大きな袋がないことくらいだ。

「な、なに？」

突然やってきた笑顔のサンタクロースに彼女は少し怯えていた。一步間違えればこの状況はホラーに捉えられてしまう。すると、サンタがずっと手を二人の前に出した。白い手袋の手が開くと傷一つない指輪があった。

横山はそれ見て、安堵した。これは自分へのドッキリではないかと思うくらい内心焦っていた。しかし、サンタにはそのつもりは一切ないという表情だった。

「お届けモノだよ。本当は靴下に入れておくんだが、今回は特別だ」

サンタは彼女に手を近づけた。

「え、私に？」

彼女は状況がまったくつかめていなかった。サンタは優しく頷いた。

「理恵。受け取ってくれないか。……婚約指輪」

横山は恥ずかしそうに言った。ようやく彼女は状況を把握した。自然と笑みを浮かべ、サンタから指輪を受け取った。

「メリークリスマス！」

サンタは低い声でかつ大きな声で二人を祝福した。そして、彼女は満面の笑みを浮かべ、横山は心から笑顔になった。

気づくとサンタは二人の前からいなくなっていた。階段に向かって全速力で走り去って行った。階段を上らず、ビルの脇へと姿を消して行った。

そんなサンタの後ろ姿を見ていた塾帰りの小学生二人がサンタを指差していた。

「サンタが走ってる」

「なんか忘れ物したんじゃないの？」

「すごい焦ってたから、そうだね」

小学生二人は爆笑する。さくらもなんとなく自分が笑われているのだと気づいていた。体中に巻いたタオルが邪魔で走りにくいわ。

「ぐはあー」

さくらは、帽子と髭を勢い良く取り事務所のソファに倒れ込んだ。今思い返しても恥ずかしい。大声でメリークリスマスと叫んだことを今さら後悔している。とっさに言ってしまったとはいえ、あの場で言うのはまずかったなと考えていた。

「やっぱり、ハッピーウェディングだったかも……それも違うかぁ」

寒い外にいたせいなのか、それとも恥ずかしかったのかさくらの顔は赤かった。

そこに事務所のドアを開けて、檜原が入って来た。

「よう、さくら。上手くいったか？」

いつもの明るい声で檜原は聞いたが、ソファに倒れ込んでいるさくらは、ワンテンポ遅れてガバッと起き上がった。

「突然、ビルに当たる光が消えて焦りましたよ。それより、私のいるところからレーザーの光が見え見えでしたけど、大丈夫だったんですか？ 指輪を落とせないからってビルに向かって光を当ててごまかすにはちょっと無理があったと思うんですけど」

さくらは一気にまくしたてて言った。

「で、二人の反応はどうだったんだよ」

檜原は、さくらの話を聞いてなかったように結果を聞いた。

「え、指輪を受け取って二人は、笑顔になりましたよ」

「じゃあ、いいじゃねえか！ いやー、良かった良かった」

「結果オーライかもしれないですけど、なんか……」

「さくら、求めすぎるのも良くないぞ。確かにレーザー光線をビルに当てて指輪が落ちるように見せかけてはいるが、二人がいたあの広場からは見えていないはずだ。上にぐるっとデッキが広がっているから、光線部分はそれに隠れて見えない。……と言う計算だ」

そう言いながら話題の中心になった例の機材を床に置いた。

「檜原さん、そんなところに置かないでちゃんと元あったところへ片……」

事務所内はまったく片付いてないから、さくらは言っても意味ないなと思って、声が尻すぼみになっていった。

結局、その日は柚木さんのケーキ販売が終わって戻って来るまで事務所の片付けを手伝わされた。とは言っても、これから片付けエンジンがかかり始めた頃、柚木さんが戻って来た。クリスマスケーキを持って。

荷物の詰まったダンボール箱を端へ追いやるだけで片付けは終わり、異色の面子でのクリスマスパーティが始まったのだった。

拍手もなく幕を降ろした今回の舞台は、あとから檜原さんの話によれば監督からオッケーの言葉をいただいたそうだ。それにクリスマスらしいセリフと演出が良かったそうだ。サンタ役のおじさんにありがたうとのこと。そう言ってもらえると、プライベートアクターってのも悪くない。まさか、中身がこんな小娘だとは全く思われていなかったのだから。少し私のできる役もわかった気がする。喜んでくれる人が目の前にいてくれるのは絶大だ。たとえそれが、一人だと

しても。

今回、榎原さんとじっくり話せて良かった。忘れることなく今後も自分に言い聞かせながらやっていこう。

事務所の窓の外に写る夜の街。駅を中心に水面のように外へ明かりが広がっていつているようだ。やがて聖夜も日をまたぐ。檜原は一人事務所で外を眺めていた。すると、檜原の携帯電話にメールが届く。

「さくらか。珍しいなあ。こんな時間になんの用だ」

——夜遅くにすみません。どうしても言いたいことがあってメールしました。失礼かもしれませんが、檜原さんは、私にとって目指すべきプライベートアクターという感じではなく、『心の先生』です。ありがとうございました。おやすみなさい（流れ星）——

さくらがまた一歩プライベートアクターとして踏み出してくれたのかな。まあ、演じてみるのも悪くなかったかもな。他の誰かより少し先を生きる者として。

終わり